諸職模樣雛形

下

第貳拾壹號

入ちび瓢箪

透唐草

瓢之透し

向ひ瓢箪

雲龍波

唐木寄板

杉
桐

ぶさん

紅葉賀（もみぢのが）

竹にすゞめ

浪

雁ま芦

蘭の花

芭蕉

波ニ千鳥

蘭竹

濱の松

つばめ

加茂の祭

西洋形ノ部
時計臺
懐中時計模様
十四

腰懸だい
椅子
寝台

古代模様ノ部

嚴島寶物内古代模様

古唐形やう

向合蝶
金唐草もやう

古形

かりぎぬきぬきのもやう

狩衣もやう

嚴島寳物古代もやう

雲龍

はじれのみき
りやう
浪に鯉

二ツ割
四ツ割
八ツ割
十六割の法

すべて此中の此すぢへもとめに引おくじ

此ヨり方先立ニ筋を引置外を廻したる分廻し其侭ニて下此一ニ印ニ立夫よりさんし二三とまるしとをまさとるべし

三ツ割
六ツ割
十二割の法

右割りさん、廻せし分廻しを其まゝ上下此・に立てし双方輪此ゆちへ墨をはあその墨へ筋を引はぜんと割るなり

五ツ割
十ヲ割
の法

右割方十ヲつるハ壁ハ一寸此丸るまハ丸三分ツヽ此分廻しまてはこぶ積りを以て試とするべし五ツ割ハ一寸乃丸ニ丸六分の分廻しニてもはこぶ法なり但し五ツ割此紋も十の割ニしくかまべ正しくまるゝなり

七ツ割
十四割
の法

右まはりハ一寸ゟ九ニて七ツまはりハ九四分二厘六毛ツゝのぶん廻しにてまはすなり 但し十四割ハ其半分乃分廻しにてまはるなり尤大小相應にまはりにて極むべし

いてしもくかふの割

まへにひし此中の四ツまはりハひしのすミに分廻を立て大てい真中と右まかとに ひらき印を付其間より間へまはるべし

九ツ割
十八割
の法

右割りハ前にあるに印を見合せ先六ツにまはり又其間を三ツつゝにまはる法を見此分廻しをもつて六ツまはりの角々へ立て双方ゟぬちへ墨を懸け扨其墨より墨へ筋を引なり 但し六ツ割を三ツにまはる一寸の丸にして九一分六厘ツゝ乃積りを以て考へ割るなし

諸莫様雛形　巻之下
二十九
片もみぢ割
片もみへ外を廻しる分廻し其侭にて立に引たる筋の下に立て矢張六ツによりて畵の如く程好見合にかくべし
鈎片合先六ツ割
鈎のうしろ三所へ畵のごとく印を付て外廻したる分廻し少しちゞめ鈎の頭三所に印墨にてくん書其後片もみ頭を見合にかくべし
たち葵の割
四方へ分廻しを立おのおの中とをりへ廻してまるなり是も一方を書て一方はうつすべし
行用牡丹の割
右畵のごとし五ツよりにて其後このより合にかくへし
井筒ぢとり
先丸をまはし其十分一を外のもとゝしてとるべし内のもぢん井づゝのふとさ相應に見はからひて割べし
むめもち早割
三
四
五
二
一
是は早よりなり此とおり立筋の下其侭にて分廻しの印付其のち一二三にまるし通りを書べし

かさね釘メの割

廻せし分廻を立ざるまゝ上下にて七分一ゞちゞめ其分廻しを左右に立てわちがひをほくりわるべし

むかひ蝶の割

上下〇に分廻しを立てまん中にはけ合を定むべし向ひ紋だきりんのたがひたてよことも此ところへおくわるべし

ほたれわり

四ッわり付見合にて畧して分廻しにて恰好付て書し但し下一枚葉より両脇の葉少し小さく上二枚葉へ下葉の分廻しにて取るべし

丸に二ッ引の割

左におなじくまんに七ッ星を入ゝくわるべし

三かい菱の割

わりかゝ三ッ引とおなじ中に星五ッにてわるべし

むかふ梅鉢割

そとわの半分を以ゝく中のわを廻し十ッわりにて中の分廻しにてわるべしをへて五ッわりの紋ともにじゆんぜべし

三ツ割唐草の割

まづ外わを廻し六ツ割りにして内乃を比わのかどより三かくを作りて花ヵかく可し

立花乃わり

丸を六ツ割りにして実は大小相應に能かんかへかさめんか書てかさめんわうつしかく可し

松かわびしの割

丸の八ァ一をふとさに取て二重わを作り上下○に分廻しを立くまん中の通りより少しせまめて半丸を引ひしをわるべし

角切かくのわり

先そとわを廻し四方おのく外わの八分一をへして角入れ立とするへ四ヶ所に半月の印を付べし畫を見合かく可し

上り藤丸わり

四ツわりにしてその内畫の通り上下へ○廻し其分廻しにて三枚葉を書扨外を廻しなる分廻しにちぢめて書可し

下りふぢの割

わり方右におなじく

中柏のわり

六ツ木割付柏の葉をさん扨其時の好ミに応し畧のことく星をかき太とさ恰好見合て書くべし

九ト三ッ引の割

そとわをまハし中をぢ通りを心にして九ツわりを入ミくまるなし紋ふときさん五ツ星を入て間をせばくまるべし

七ツ割四ツ目ツ法

畧の通り八ツ割をくけ外の角栈書中十もんじへ見合ふ如此七ツ割書定木ふし此わり合に書べし

桐乃との割

外とわの上下ふミくすこしかき八ツ割を以て書くべし総てかくのごとき紋類ハ片面をくきかさ面ハ折てうつしべし

星七宝乃わり

あまきを八ツわりにて畧のごとく星をかき外廻しする分廻しおろく中を書し尤半分ハ折写してよし

あふき乃わり

先丸をまハしその七アの一をとるめとして分廻しを立べしをりめを書へ上てわりくる免をあんとしてすぢを引べし

笹もんとの割

八ッ割にて真中へ畾のごとく星を付さて其上へ少シ大きく又星を書又さゝはへ星を書て花をはぐるへし是もは面書て折写しかくべし

いつゝ七寳の割

八ッ割にて畾の通り上下八分よりを以て印墨を付且四方へ見合に星を廻し又外廻しする分廻しにて如此上下いびつ書べし

三ツ巴の割

三ツ割にして畾のごとく○を廻し後にあしをかくべし

桔梗の割

五ッにわり付畾のごとく定木にて印置其のち大小見合乃分廻しにて両方のくる書べし

うづのわも

丸を廻し六ッ割にして正中のしんより二の三のうづになど△か△迄左半分廻し置扨○の所に分廻しをたてゝ左の引かけたるすじに合して△より△まで右半分まわすべし

かくドのもり

如此ごばん罫(けい)線引てもりこむべし太字のときは間をせもくするべし又香の畾のもりくさも是とおなじことなり

地紋割（ぢもんわり）

割方種々あまたとも正しく便利なる法をかんがへ撰び最ふ粗あらんと雖とも猶其時の好みに應し新工夫發明し書べし

萬字繫（まんじつなぎ）

俗にまんじがうしといふ

下地ハごもん罫をゝ取ふしてかくのごときりのを以くつなぐべし

毘沙門亀甲（びしやもんきつかう）

下地ハつねだ三角を引なるべし但し三ろくをこまかく引くつなぐべし

錦形（にしきがた）

下地ハおもん罫を引上へ大なりをまなぶべし内わりゆうハ何にてもよし

寄合崩（よせあいくづし）

畳乃ごとくなりより付置角五ツ枝井筒一ツ取込書なり

檜垣（ひがき）

下地ハ法ほに立ひしをりつくるなるべし

萬字崩（まんじくづし）

下地ハつぼのよこひしを引置大わりを入るなり

麻葉（あさのは）

此ハ三角形の小割を立ひしなわり付其上へ同し形の大わりを造扱小わりをかくこ

蜀紅（しよくこう）

下地へおまん罫を引其上へ大わりをなすべし内の模様ハ何にてを用ゆべし

職訣模様雛形 巻下
三十六
脹雀（ふくらすずめ）
圖のごとく十もんじを引てかくべし
銀杏菱（いてうびし）
圖のごとく十文字より付大小見合て書べし
籠目（かごめ）
下地三角なとの立じを二すぢに引
又六角になるやうよこ筋を引て書べし
浮巣崩（うきすくずし）
圖の通りより置四角墨書外後上下両方乃角取て置中かくなり

分銅菱
ふんどうびし
下地ハ二重のすぢびし
を引二重ハ内外をう
七寶
しつぽう
唐たてわききん角より
いづるなり
前と同じ

八重麻

もろし麻と同
し様に割付
て中へ二重に
書込べし

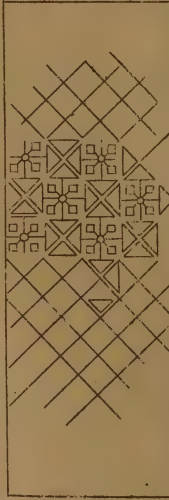
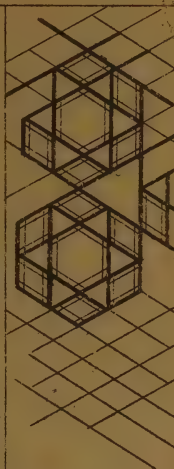
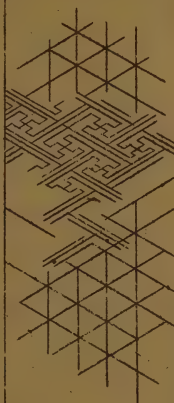
花かご形

菱を一ッさむし
なをればよろ
しき駕籠と成

井筒亀甲

通れいの亀甲
を引のむして
うさねうけるべし

四角より八
八角志よおう角をうとだし
てよろし

六よふ千切
ひしを二重ニ割その中へ
*を書入るへし
六ツ廻りせいろねより九とう
亀甲のかど
さ祢る初なり
すゝし麻
横うろこを
して内ニ*の
筋をたよ里とす
うろこ四ツ目
菱四ツ目より
角ニ割出す
べし
諸莫様雛形
三十九

六角亀甲いだすなり
菱より

始めは亀甲
むすび亀甲を出し割へし

横菱より
うけいなつま割出し三筋
を初て引分る

前同断二筋
表稲つまを初て引て
十の字を掛る

角立ぶんどうし図の如くなすべし
角より割

重志をくおう左右へ引出すべし
角を拵へ夫々

菱持いなつま卍を初め拵へのちつなぐべし
菱より出し

ゐん引亀甲丸を割六角
菱の志んへ
と次第て成すべし

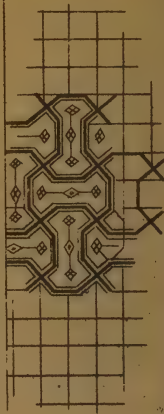
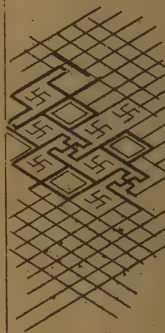
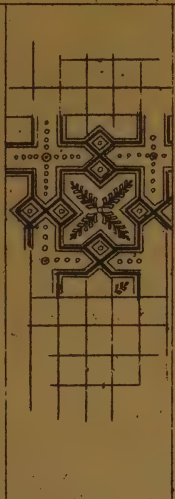
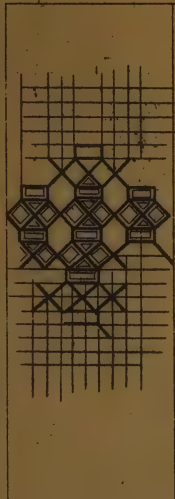
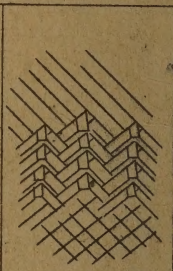
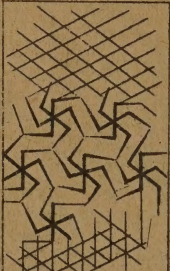
角志ようこふ

角く三ッと ひとしゝて内ゝ 横角くを搾るべし

細き角くよ きりおつなかり出して図の如く割べし

糺あさ

菱より出す なり志らし 口傳物なり

菱より割出 麻もちがひして其侭書き ことてよし

金菱
圖のごとく
ひしよりかきこむべし
三ツ割六角斤喰
下地ハ亀甲より割出し書なり
むすびこふ
立菱より割出すべし
糸亀甲
横うろこの中をよけて二筋づゝ引べし
寄合菱
本来ハ菱より出るなり
結びこふ
直角を菱にあして認るべし
千階波
角より割出てゑんをとるべし
角祢じ六手
菱よりつゞるなり

明治廿二年九月三日印刷
仝年仝月七日出版

版權所有

發行者　井上勝五郎
京橋區南紺屋町一番地

印刷者　渡邊直之
仝區南鞘町拾三番地

2022.8207 v.2